

■ 優秀会社史賞 ■

『旭化成八十年史』(2002年12月 807p 29cm)

『旭化成八十年史 資料編』(2002年12月 199p 29cm)

『Asahi Kasei: The First 80 years 旭化成の80年』(2003年6月 169p 15cm)

旭化成株式会社発行

旭化成は、旭化成工業としてこれまで小規模な会社史（たとえば『旭化成三十年の歩み』1953年、25ページ）や部門史（たとえば『旭化成レーヨン部史』1951年、125ページ、『薬品部30年史』1954年、412ページ）、工場史（たとえば『レーヨン工場史』1964年、198ページ）を刊行してきたが、本格的な会社史は出版したことがなかった。本書は、創業80周年を迎えた旭化成が刊行したはじめての本格的な会社史であり、807ページの本編と199ページの資料編からなり、社外の経営史研究者が執筆にあっている。旭化成は、普及版にあたる『Asahi Kasei: The First 80 years 旭化成の80年』（169ページ、和文）も、あわせて刊行した。なお、本編と資料編の表紙にベンベルグの生地を使用している。

本書は、社内外の資料を駆使して実証的、分析的な記述を展開しており、過去において優秀会社史賞を受賞した化学会社の会社史と比べて、遜色のない内容となっている。したがって、本書を第14回優秀会社史賞の受賞作とすることに対して、審査員の間からとりたてて異論は出なかった。

本書の膨大な記述のなかから、とくに注目すべき部分をいくつか拾ってみよう。

まず、創業当初の技術選択に関する叙述が充実している。グランツシュトフ社からのレーヨン技術導入による旭絹織の設立、カザレ法アンモニア合成技術の導入による日本窒素肥料延岡工場の建設、ベンベルグ社からの技術導入による日本ベンベルグ絹糸の設立などに関する記述は、詳細にわたる。

戦後のダウ・ケミカル社との提携交渉に関する叙述も興味深い。ダウ・ケミカル社がもつサラン技術をめぐって呉羽化学との間で争奪戦を展開したことが、その戦いに勝利して旭ダウの設立を実現したことが、ヴィヴィッドに描かれている。

また、1948（昭和23）年の延岡大争議だけでなく、57年の一時帰休問題や61～62年のカシミロン不況による賃金抑制も、旭化成の労使関係史上、重大な転機であったこ

とが明らかにされている。これらの試練を乗り越えることによって、良好な労使関係が形成されていったのである。

さらに、石油危機以後の時期に売上構成面でウエートを増す建材・住宅事業に関して、早い時点で代理店方式から直販方式への変更を行ったことも、詳細に叙述している。「代理店方式の失敗」を率直に認め、それがもたらした問題に前向きな姿勢で対応したことが建材・住宅事業の飛躍の一因となったと叙述している部分は、本書の分析性の高さをよく示している。

一方で、本書には、いくつかの点で不満が残るのも事実である。

第一に、説明が十分とはいえない部分が散見される。終戦直後の日本窒素肥料からの独立、1948年の延岡大争議の收拾過程、52年のデミング賞受賞の経緯とその後の生産管理への影響、戦後の事業多角化にともなう社員教育のあり方の変化などに関する記述には、物足りなさを感じる。

第二に、戦後の各章で「大物ぶり」がさかんに強調されている宮崎輝の経営戦略とその成果および問題点について、まとまった記述がないのは問題である。このため、宮崎が推進した多角化戦略とそれに対する歴史的評価がはっきりせず、統一的な視座が打ち出されていない。本書の後半部分に関して、多角化した諸事業の説明のみに汲々としている印象が残るのは、このためであろう。

第三に、序章・第1章と第2章以下との注の表記が違いすぎることも気になる。序章・第1章の注は、やや冗長である感が否めないし、逆にあまりにも簡単な第2章以下の注は、序章・第1章と比べてあたかも資料発掘に不熱心であったかのような誤解を生みかねない。

なお、蛇足かもしれないが、個人的意見としては、旭化成の会社史に、宗茂・宗猛兄弟や谷口浩美らが登場しないのは、寂しい気がする。

(橘川 武郎)